

福井支部ニュース

2022年度 第10号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆2022年度 JSA 福井支部 第5回幹事会の概要報告 (山根 清志)
- ◆随想 古本屋のひとりごと (4) (高木秀男)
- ◆時評紀行 風力発電・放射性廃棄物紀行 (3) 対馬 (小野 一)

[2022年度 JSA 福井支部 第5回幹事会の概要報告]

2023年1月9日(月)午後6時から第5回幹事会がこの度もオンラインで開催された。

事前に案内のあった議題が表記の順番通りに議論された。①支部例会、②支部結成50周年記念事業について、③『福井の科学者』と支部HPについて…2022年12月号案、④支部ニュースについて、⑤第24回総合学術研究集会 in 大阪について、⑥支部財政と会員拡大について、⑦JSA 北陸3県の会議について、⑧JSA 全国より…役員選考のための事務局員、代表幹事候補者推薦のお願い、⑨学習会、集会などの紹介、⑩その他、である。

会議の冒頭で、福井支部の会計監査の大山利夫さんが昨年11月22日

に急逝されたことが報告され、出席者全員で哀悼の意を表した。

まず①について、本年に入ってから支部例会第1号は、高木幹事による報告「科学者の権利問題」をテーマとするものとし、日程：1月23日(月)18:00～、オンライン開催、で行うことを決めた。第2号は「原発問題」をテーマに、岸田政権のデタラメな原発回帰政策に反対する意味合いもつものとし、日程は2月半ば(2/18, 23, 25, 26あたり)、会場は教育センター会議室、例えば山本、笠原両氏に各20分ずつ話をしてもらい、後は会場から意見を出してもらおうというようなやり方ではないのかということになった。テーマ「『大学の自治と学問の自由』と学術会議問題」、テーマ「核共有・アメリカと約束をしている問題について」に関しては、例会実現に向けた取り組みのこれまでの進行状況が説明された。

②について、第2回幹事会で(1)『福井の科学者』の50周年記念号を発行する、(2)『福井の科学者』の合体版(電子版)をつくる、(3)別の議論を開始する、という3点を確認している。今回幹事会で、高木幹事を座長とするところの、実行委員会(プロジェクトチーム)を立ち上げることになった。

③について、編集長の欠席により、直の説明は聞けなかったが、遅れていた『福井の科学者』2022年12月号は、ようやく原稿がなんとか集まって、明日(10日)印刷所に渡すとのこと。但し発行日に関しては、当初の予定を変更し2023年1月号として発行することを第5回幹事会として決定した。

④について、前回幹事会(11/14)後、第8号・第9号と2号分の支部ニュースが発行されている。小倉幹事によれば第10号は早くに出せるだろうとのこと。なお、これまで支部ニュースを本部の松下氏には数号分まとめて送っていたようであるが、できれば発行の都度送って欲しいとの代表幹事からの要望があった。

⑤について、11月19日午前のA-1分科会で小野国際部長・支部幹事が司会を務めて挨拶と趣旨説明、山本代表幹事が報告し、11月20日

午前のB-3分科会では山本代表幹事と山本支部事務局長が報告した。総学参加者が累計で1400人を超える近年にない盛会となったことを、確認した。

⑥について、会計担当の伊藤幹事から会計状況報告の説明があった。なお、会費請求に関して：1月中旬に、2023年前期分および未納分について請求する予定とのアナウンスがあった。会員拡大については特にはなかった。

⑦について、[2022年度北陸地区シンポのテーマについて]本年度担当の石川支部からの提案「選択と集中を基本方針とする政府方針は、大学の改善に資するものになっているか」(仮題)として「企画原案」化がなされている由。これに対し、果たしてそれは第24回総合学術研究集会in大阪におけるE1-1、E1-2、E1-3等の報告をも踏まえたかたちになるのだろうかとの疑義が一部から呈された。

⑧について、福井支部からは推薦なしという状況とのこと。

⑨・⑩のその他については、特になし。

次回の幹事会は2023年2月6日(月)18:00~ということに決めて、20時20分第5回幹事会は終了した。出席幹事は7名であった。

(山根 清志)

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースを支部会員間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。

- ◆ジャーナル評論：「日本の科学者」「福井の科学者」の評論
- ◆時事評論、意見・見解
- ◆活動報告・経験報告・事例紹介
- ◆行事案内、会員への案内・お知らせ
- ◆その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、何でも支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。

yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp

ogura@u-fukui.ac.jp

〔随想〕 古本屋のひとりごと (4)

金沢大学工学部の非常勤講師をしているとき、金沢大学教授でJSA石川支部事務局長の直江俊一氏に、古書と古美術の「科学堂」というインターネット店舗を開いたと話したことがある。そうしたら、直江氏が「自分の同級生に「谷庄」という古美術商の主人がいるので紹介しようか」と言ってくれた。「谷庄」は金沢で最も有名な老舗古美術商なので、当然私も名前は知っていた。だが相手は玄人で私は全くの素人なので、紹介してもらっても恥をかかすだけなので丁重に辞退した。このとき直江氏は、同級会の席で「谷庄」の主人にこれまでに売った一番高い商品はどんな物か聞いたら、1億円の茶碗を売ったことがあるという興味深い話をしてくれた。

「老舗の古美術商」というのは、長い商歴と高額商品を買ってくれる上得意の顧客をもっている商店を指す言葉なのである。趣味でネット上に店を出している素人の私とは、まったく格が違うわけである。ちなみに科学堂でこれまで売った一番高い品は、陶芸家で最初に文化勲章を受章した板谷波山の水指(170万円)で、購入者は岡山県の歯医者さん。二番目が宮尾栄助の金工品・武士火消像(110万円)で、購入者は在日の英国人だった。

古書でも高価な古典籍を扱うには専門知識が必要だが、古美術品や絵画はけっこう贋作が出回っているため、古美術商にはどうしても知識と眼力が必要である。古美術商の主な仕入れは入札会で現物を見て落札するが、ヤフーオークションを利用する素人の場合は、実物を見ないで写真と説明だけで判断しなければならないので、高額商品の場合はリスクが伴い入札に勇気がある。それに焼き物の場合は時代の判定が極めて難しいし、絵画の場合は真贋の判定が素人には無理である。ただし入手したものが本当に良い物であったかどうかは、時間がたてば素人でもたいていわかる。優れた本物は、長く飾っておいても決して飽きがこないからである。

古美術品の中でも茶道具は相対的に高値である。それは今に始まった訳ではなく、戦国時代からそうで、利休は茶道具の値を上げて儲けたとか、

「平蜘蛛の茶釜」や「付藻茄子の茶入」のように命や城一つと交換する話もあった。骨董品は大きく分けて上手物と下手物に分けられ、鑑賞陶磁や高級茶道具、有名作家の作品は上手物である。下手物は民芸的な温もりや安らぎを感じる日用雑貨で、柳宗悦が見いだした李朝の民芸品は下手物でも高価である。粗悪で品位のない物は、ゲテモノと呼ばれガラクタである。

「開運なんでも鑑定団」という番組がある。我が家のお宝と思われる品物を持ってきて専門の鑑定士に鑑定してもらう番組である。タダでもらった品が高値で鑑定されたり、本物と信じて高値で買った品が二束三文のガラクタであったりするが、本物についての解説もあって勉強にもなる。だが、私が特にお勧めしたいのは、「ぶらぶら美術・博物館」という番組である。注目すべき展覧会などを紹介する番組だが、山田五郎という番組の主演がたいへんな博学で、いつも展覧会の説明役の学芸員より山田五郎の方が多く説明してしまう愉快的な番組である。

「伊万里の値を決めた男」と呼ばれた中島誠之助は、著書の中で「骨董屋にとって大切なことは、心の勲章を持つことである。前の時代から次の時代へ、ひとりの人から別の蒐集家へと、品物の受け渡しをしてゆくのがこの商売であるからには、名品になればなるほど手元に残らない。良いものを扱ったという思い出を胸に持ち続けることが、すなわち心の勲章なのである」と述べている。私が売った板谷波山の水指や宮尾栄助の武士火消像は、間違いのない名品であったと今でも自信をもって言える。(つづく)

(高木 秀男)

2023年前期の会費納入をお願いします

新しい年が始まりました。今年前期の会費をお願いします。また、過去の未納会費のある方は、分納でも結構ですので、至急納入をお願いします。

【時評紀行】風力発電・放射性廃棄物紀行（3） 対馬

昨夜の夜行船、玄界灘はあいにくの大時化。すぐにでもベッドに横になりたいところだが、仕事で来ている以上そうも行かない。かといって開始時間までは少し間がある。島の中心部の厳原では、どこの地方都市もそうであるように何の変哲もない建物が立ち並び、ひととおりの用は足せる。全国チェーンのコンビニに入り、安物の惣菜パンをかじりながらコーヒーを流し込んでいると、学校帰りの女子高生が入ってきた。女子高生の他愛もないおしゃべりは、全国どこでも似たようなもの。彼女たちは数年後、どのような人生を歩んでいるだろうか。生まれた島で、あるいは別の街で。

放射性廃棄物最終処分場が究極の迷惑施設であり、誰も引き受けたがらないこと（Not In My Back Yard を略して NIMBY とよばれる）は、前回も述べた。それでも最終処分場の立地選定は必要なため、2000年には「特定放射性廃棄物の処分に関する法律」が制定。原子力発電環境整備機構（NUMO）が設立され、候補地公募が始まった。だが正式に応募した自治体はなく（興味を示した高知県東洋町は町長リコール運動により応募中止）、政府は自ら候補地をリストアップし補償措置を検討する方針に転じた。

2017年7月の科学的特性マップの発表も、この延長上にある。同時に資源エネルギー庁ウェブサイトに掲載された文書には、次のような一節がある。「全国各地で国民や地域の方々ときめ細かな対話活動を積み重ねていきます。そうした活動を通じて国民や地域の方々の理解が深まり、やがて調査を受け入れていただける地域が出てくれば、文献調査を進めていくこととなります」。ここには原発推進派の本音が余すところなく表現されている。迷惑施設を立場の弱い地域に押しつける意図は明らかだが、候補地が見つかるまでは低姿勢を貫き、タテマエであっても草の根の対話を地道に続けていく。

こうして始まった NUMO の対話型全国説明会。2021 年 11 月 23 日には、長崎県対馬市で開催された（ちなみに、その前は 11 月 11 日に福井市織協ビルでの開催で、JSA 福井支部の某氏が乗り込んで担当者泣かせの質問をしたのだとか）。すでに主要都市や原発立地で開催実績があるが、ここに至ってなぜ対馬なのか。調べてみると、過去に地元政治家の間で誘致運動があったらしいのだが、今回の開催はそれとは関係ないと担当者は説明する。対馬へは交通の便が悪く、「国境の島」という特殊事情も絡む。

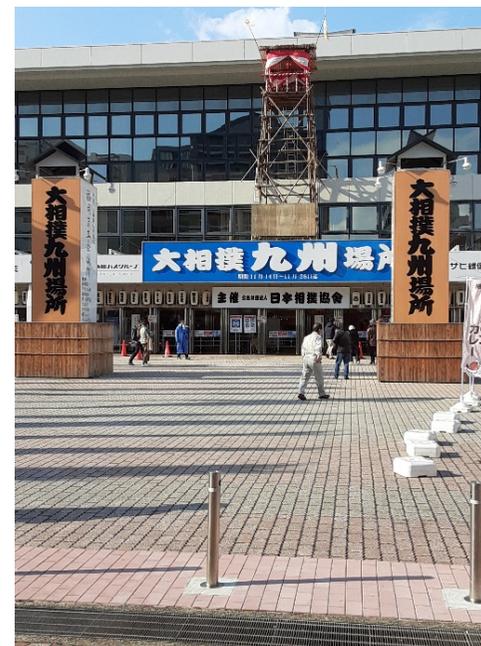
全体説明に続き、説明会の後半では小グループに分かれ討論を行う。私のテーブルには、市議会議員 2 名と学校の先生が同席だった。いずれも誘致派で、熱烈な売り込みに圧倒されるほど。よく来てくれた。とにかく作って欲しい、早く作って欲しい、ライバルにとられる前に。産業に乏しい島を施設誘致で活性化させたい。対馬空港に東京や大阪から直行便が乗り入れると、多くの人が出てくる。いっそ NUMO の本社ごと対馬に移転してくれないか。近いうち、また来てくれ。

説明会会場を後にし、ホテルで部屋着に着替えてくつろいでいると、館内電話が鳴った。「面会希望の市議会議員さんがロビーにいらしてます」。わざわざ東京からの来訪ということで、珍しがられたのだろうか。お土産まで頂いてしまった。詳しい話をお伺いできたのだから、私としても来た甲斐があったというもの。「かつて 7 万いた人口も今では 3 万。産業を誘致しないと、若い人が島から出て行ってしまふんですよ。多くは福岡に」。何気なく聞いていたこの言葉が、翌日、強烈な印象とともに蘇ってくる。

観光資源も多くない対馬。長居は無用と、朝一番の船で帰ることにした。5 時間の航海を経て博多湾に入った時、思わず息をのんだ。あまりにも都会的な福岡ウォーターフロントの摩天楼に、近未来を予感させるかのような高速道路。こんな光景を島育ちの若者が見てしまったら、もう島の生活には戻れまい。是が非でも最終処分場を誘致したい人の言い分はよくわかる。第三、第四の寿都は全国至るところにあるのだ。

暗澹たる気持ちで埠頭に降り立つ。バスの発車を待つ間、少し歩いてみた。幟旗が立ち並び、何やら賑やかだ。髷を結った大男が、着物に下駄履きで闊歩する姿も。大相撲九州場所。その模様はここから全国中継される。福岡国際センター前の雑踏にもまれながら、対馬のコンビニで見かけた高校生のことを思い出す。彼女たちは数年後、どのような人生を歩んでいるだろうか。生まれた島で、あるいは別の街で。

(小野 一)



≪編集後記≫

福井支部ニュースの第 10 号をお届けします。

岸田政権が、閣議決定を乱発し、国民も国会も無視して「暴走」しています。閣議決定の乱発は安倍政権から始まったらしい。村山談話の換骨奪胎をねらった閣議決定「侵略については定義が確立されていない」がその嚆矢だそうです。党首討論で志位氏からポツダム宣言について質問され「まだその部分をつまびらかに読んでいない」と答えてしまって、急遽閣議決定で「安倍内閣総理大臣は、ポツダム宣言については、当然読んでいる」と公式文書にしました。「桜を観る会」問題での「広く募ったが、募集はしていない」という言葉の解説をする閣議決定まであります。

安倍時代には安保法制をはじめ米国がらみの案件でも沢山の閣議決定が行われました。岸田政権は、この「閣議決定」による政治を格段に強めていて、自民党重鎮の河野洋平氏などが批判しています。編集子は、これはほとんど「独裁政治」ではないか、と感じています。独裁政治は 1 人の独裁者だけで成立するわけではなく、必ず積極的な幹部組織があり、ショックドクトリンを期待する便乗者・追従者などが多数組織されているはずで、麻生氏がいみじくも言ったように、ワイマール憲法下でナチスが権力を握った手口を学べ、と言うわけです。(OG)